

Tazaki 財団英国留学支援奨学金
留学報告書

所属（本学）	環境・社会理工学院 融合理工学系 地球環境共創コース
現在の学年	修士 2 年
氏 名	小島 渚乃
渡 航 先 国	グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国
渡 航 先	Imperial College London
渡航プログラム	International Research Opportunities Programme
渡 航 期 間	2025 年 6 月 30 日～8 月 22 日

本報告書は、2025 年夏に Imperial College London の Dyson School of Design Engineering にて実施した短期研究滞在（IROP）について記すものである。滞在中は、Céline Mougenot 准教授が主宰する Collective Innovation Lab、および Weston Baxter 講師による Interaction Foundry に所属し、主に「不妊治療関連スマホアプリにおける共同意思決定のデザイン」に関する研究に取り組んだ。具体的には、日本とイギリスという異なる文化・制度的背景を持つ国における共同意思決定支援のあり方を比較し、その差異や共通点、ユーザーインターフェースに求められる要件について考察した。

1. 留学概要

1.1 IROP (International Research Opportunities Programme)

本プログラムは、Imperial College London が主催する短期受け入れ型の国際研究プログラムであり、MIT（マサチューセッツ工科大学）、TUM（ミュンヘン工科大学）、University of Toronto、Cornell University、そして東京科学大学から選抜された学生が、Imperial にて約 2 ヶ月間にわたり研究活動を行う。今年は、これらの大学からおおよそ 30 名の学生が参加し、各自の専門に応じて Imperial 内の研究室に配属された。



図 1 IROP 集合写真

1.2 Imperial College London

Imperial College London は、QS 世界大学ランキング 2025 において世界第 2 位に位置づけられた、理工系を中心とする世界有数の研究大学である。キャンパスはロンドン中心部、South Kensington に位置し、Hyde Park、Royal Albert Hall、自然史博物館、ヴィクトリア&アルバート博物館といった名所に隣接している。都市の喧騒と豊かな緑、文化芸術施設が融合する恵まれた環境の中で、知的好奇心と創造性を刺激される日々を送った。

1.3 Dyson School of Design Engineering

私が所属したのは、Imperial 内の Dyson School of Design Engineering である。

Imperial では各学部企業スポンサーがついており、この学科は英国の電機メーカーDyson が支援している。Design Engineering は、工学的アプローチとデザイン思考を融合させた学際的な研究を推進しており、技術と人間中心設計を両立する先端的な教育・研究環境が整っている。

1.4 Collective Innovation Lab と Interaction Foundry

滞在中は、Céline Mougenot 准教授が主宰する Collective Innovation Lab と、Weston Baxter 講師による Interaction Foundry の2つのラボに所属した。前者は、共創的なデザインプロセスや市民参加型のイノベーションを研究対象とし、後者はユーザーの行動や認知に着目したインタラクションデザインを探究している。両ラボとも、人間中心デザインを基盤に、社会課題に対して実践的かつ理論的にアプローチするという点が共通している。

2. 留学中の勉学、研究等について

渡英直後の約1ヶ月を、修士論文の執筆に費やすこととなった。本来、ロンドンに発つ前に修論を完成させる予定であったが、予定不調和により提出締切ギリギリまで執筆に取り組むこととなってしまった。当初は、自分がなぜインペリアルに在ながら日夜修論に追われているのかと自問し、出発前の不手際を悔やむ気持ちが強かったが、過去を嘆いても仕方がないと発想を転換し、むしろ修論執筆環境として非常に恵まれているのではないかという考えに至った。

一時的にインペリアルの学生となったことで、図書館をはじめとするインフラを自由に利用でき、科学大と比して格段に広範なジャーナルや電子書籍にアクセスできた。特に印象的だったのは、多くの学術書籍の電子版に即座にアクセスできた点であり、これまで日本語の学術書ではそもそも電子版が存在しない場合が多く、情報へのアクセスが容易であることが、いかに心理的・時間的コストを軽減するかを痛感した。科学大にも優れた図書館サービスが整っており、文献複写や図書購入制度などが充実しているが、インペリアルでの「欲した知へのシームレスなアクセス」という体験は、自分にとって非常に衝撃的であり、学術環境の違いをまざまざと感じさせられた。

また、理系大学として知られるインペリアルでありながら、その図書館や電子リソースの多くは人文社会系の知にも十分に開かれており、学際的な研究へのリスペクトが制度的に担保されている印象を受けた。自分の研究は理工系と人文系の交差点に位置するものであるため、これまで科学大に在籍しながら読みたい文献にアクセスできない経験も少なくなかったが、インペリアルでの環境は、そのような研究にも真摯に向き合ってくれているような感覚を与えてくれた。

修士論文の執筆に関しては、科学大の指導教員と密に連絡を取り合うと同時に、発表直前には、私の研究背景を知らないインペリアルの学生や教員に対してもプレゼンを行い、まっさらな視点、または彼らの専門分野からのフィード



図2 そこかしこに Dyson 製品



図3 大好きな友と

バックを得ることができた点も非常に有意義だった。

研究という文脈で語るにはいささか突拍子なく聞こえるかもしれないが、日照時間の長さは精神的に大きな助けとなった。朝 4 時台から太陽が昇り始め、夜 22 時を過ぎてもなお明るいという環境は、作業へのやる気を維持する上で非常に効果的だった。寮に帰宅後もなお活動を継続することができたし、研究以外の時間においても「まだもう少し何かできそうだ」という感覚が 1 日をより豊かにしてくれた。

一点、自分の不得手な点でもあるが、2 ヶ月という短期間（実質的には修論期間を除いた 1 ヶ月）でどこまで研究を進めるべきか、どこを最終目標とすべきかを判断するのが難しかった。いざ始めてしまえば研究は非常に楽しく、時間が経つのを忘れるほどだったが、開始時点で方向性の定め方には苦慮した。IROP に参加していた他の学生たちと話す中で、短期滞在における研究の意義やゴールの定め方に悩んでいたのは私一人ではなかったことがわかり、やや救われる思いがした。

3. 異文化適応と国際感覚を磨いた経験

ロンドンで過ごした 2 ヶ月間は、日常の中に、異文化との出会いや国際感覚の醸成の機会が自然に織り込まれていた。印象的なエピソードを以下に挙げる。

- ・ ワークライフバランス：私が使用していた学生室で、デスクが隣だった研究員のことがとても印象に残っている。彼は 16 時 50 分頃になると作業と並行しながら周りのものを片付け始め、17 時になった途端 PC の電源をオフにし、自転車用のヘルメットを被って Ciao と言いながら帰宅していく。最初のうちは偶然 17 時なのかと思ったが、毎度このルーティーンなのだ。彼に限った話ではなく、夜遅くまで学生室に残って作業する人はおらず、かと言って帰宅後に作業をしている様子でもなかった。このオンとオフの切り替え、そして仕事や学業のみに全ての時間を費やさないという在り方は、日本ではあまり感じたことがなかった。また、教員を含めたほとんどの人は 1 週間～1 ヶ月の休暇をとることが当たり前で（私が今回二つの研究室に滞在となったのも、メインのホストスーパーバイザーが私の滞在中に約 1 ヶ月の休暇を予定していたため、彼女が休暇中のスーパーバイザーとしてもう一つの研究室にも所属することになったのだ）、日本の学生や労働者とインペリアルで触れた彼らのワークライフバランスの違い（特に私生活の尊重度合い）を感じる機会がとても多かった。

ワークライフバランスという枠ではないが、しかし働き方や仕事への姿勢という点で、以前東工大で教鞭を取っていたホストスーパーバイザーが、「東工大で働いていた 7 年間同僚が入れ替わることはほとんどなかったけど、インペリアルだと 2～3 年で転職していく人も多い」と話していたことも印象に残っている。

- ・ アクセシビリティ：研究室の友人と Wellcome Collection という美術館を訪れた際、その展示のアクセシビリティの高さに驚愕した。最近はどこでも見かけるようになった音声案内（どこでも見かけるようになったが、有料なことも多い）に加え、手話（British Sign Language）通訳、作品の説明文を大きな文字で印刷した冊子、作品の説明文を点字にした冊子など、訪れる人の需要をできる限り網羅し、多くの人がその人のやりやすい方法で情報を摂取することができるような工夫が随所に施されていた。視覚に困難を抱える人、聴覚に困難を抱える人、多くの



図 4 Wellcome Collection にて

「障害者」とされる人たちが、想定されていない存在としてではなく、その需要が当

たり前のものとしてそこに用意されているという、公共空間のあるべき姿を見たような気がする。(但し個人的な所感としては、ロンドンのあらゆる場所が最高にアクセシブルだったとは考えていない。)

- ・ 忘れたくない会話：とある週末に何人かとセブンシスターズに行った際に知り合ったインペリアル大学の学生は、特にインターンをしているわけでも研究をしているわけでもないが、夏休みの間も私と同じ寮に滞在しているらしかった。インペリアル大学の学部で数学を専攻している彼は、「自分はまだ英語が得意じゃないけど、でも数学をやってる限り特に英語でのコミュニケーションに困ったことはない」と話してくれた。大学入学と同時にイギリスに来たのか尋ねると、「戦争が始まったからイギリスに来た」と彼は教えてくれた。ウクライナのキーウ出身の彼は、「家族は今みんな別々の国にいるから帰省する場所がない。だから特にやることはないけど夏休みもイギリスに残っている」とのことだった。人と会話する際は、あまりその人のバックグラウンドに無遠慮に立ち入らないように気をつけているつもりだったが、それでもまだ自分は無知で、自分の知る範囲での配慮しか知らないのだと痛感した瞬間だった。彼の境遇を知り、返す言葉が見つからなかった。彼からはウクライナ語の言葉をいくつか教えてもらった。忘れないようにしたい。



図 5 Seven Sisters にて

- ・ ロンドンプライド：ロンドンプライドへの参加も大きな体験だった。留学初日に行われた IROP のイントロダクションで、インペリアル大学のプログラム担当者が「ロンドンのプライドパレードはなぜか 7 月にあるから（一般的にプライドパレードはプライド月間の 6 月に行われる）、みんなも予定が合えばぜひ行って見て」とアナウンスしていた。結局 IROP のメンバー何人かで行くことになったのだが、終始圧倒された。パレードを歩き踊る人たち、風に靡く様々なフラッグ、爆音で流れるアンセムの数々、力強いメッセージが書かれたサインたち。性的マイノリティの権利について、日本と比較すれば進歩的なイギリスだが、しかし例えば今年の 4 月にイギリスの最高裁判所は、2010 年制定の Equality Act における「女性」の定義について、生物学的性別であり GRC（性別認定証）を取得しているトランス女性が含まれないとする判決を出した。



図 6 London Pride 2025 の様子

要するに「トランス女性は女性ではない」と捉えられかねない判決が下されたのだ。そんな時勢の折行われたプライドパレードではためくトランスフラッグは何よりも力強かった。その人がその人として生きることが、社会の取り決め上とても困難な世界の中で、ロンドンプライドで触れた景色はどれも私を勇気づけたし、そこに集う人々の熱気と笑顔は、ただ祝祭的というだけでなく、確かな勇気と希望を感じさせるものであった。イギリスらしさで言うと、几帳面に整列したイギリス近衛兵の間をドラァグクイーンが歌い踊る姿は最高だった。

- ・ 自分のルーツについて知る：日本を客観的に見ることをこの留学の目的のひとつとして挙げていたが、留学を経ての所感として、客観的に見ると同時に、主観的に自分のルーツについてもっと深く知識や考えを持ちたいと思った。一度、同じ研究室の博士の学生が、「ナノの分も予約したから一緒に行こう」と言って、学内の料理セミナーのようなものに連れて行ってくれた。それは「みんな料理を作って食べる」だけでなく、「みんなである国や地域の料理を作り、その料理を通してその文化や社会に触れる」という、異文化交流的な目的を持ったセミナーだった。



図 7 料理イベントにて

広いキッチンルームには所狭しと食材が並べられ、中学や高校の調理実習のようにグループが割り振られ、グループごとに違う料理を作り、最終的にそれをみんなで食べた。私が行った回は東アジア、特に中華圏の料理で、どの料理もとても美味しかった。驚いたことにこの料理セミナーの企画は学生たちで、今回の場合、中国、台湾、マカオ、シンガポールなどからの留学生がメニューの立案やレシピの作成を行っていた。食べる前に企画者の何人かの学生がそれぞれの料理の背景について話してくれた。聞きながら、果たして自分はここまで深く日本の料理について語れるだろうかと考えた。答えはすぐに出て、おそらく自分の経験ベースではいくらか喋れても、その背景や歴史については何も知らないのではないかということに気づいた。インペリアルで出会った学生、特に留学生は、自分のルーツについてとてもよく知っていた。歴史、文化や伝統、他国との関係、経済状況。今後の海外でのキャリアに向けても殊更、日本を含めた自分のルーツについてより深く知識をインプットし、思考していきたい。

- ・ ライブに行った：私のバケットリストのひとつに、「イギリスでロックバンドのライブに行く」というのがある。図らずも、今回の滞在でこの項目にチェックを入れることができた。寮で「出身地の料理を振る舞い合おうの会（このときはドイツ、マレーシア、イタリア、日本）」を行なった際に出会ったインペリアルの学生と話していると、共通の趣味である音楽の話で盛り上がった。とんとん拍子で話は進み、彼がその週末に行く予定だったライブに私も一緒に行くことになった。私にとって初めての海外でのライブは、ただ圧巻の体験だった。ライブでは、昨今日本で（特に大きな規



図 8 MTV 時代を彷彿とさせる
The Smashing Pumpkins

模のライブで) 禁止されることが多いモッシュ、サークル、リフトといったライブ文化が生き生きと展開されていた。(安全上の理由で日本でこれらが禁止される意味は重々理解している。) 胸郭が揺れるほどの爆音の中で踊り狂う群衆は凄まじくロックで、音楽と共にその文化的成熟に感銘を受けた。屋外のライブでとても暑い日だったこともあり、ライブスタッフから観客へ給水が欠かさずに行われていたのもとても印象的だ。



図 9 人が舞うリフトの様子

- ・ Ideas Lab: プログラム初日に、「とてもクールな場所だから」とホストスーパーバイザーに連れて行ってもらった Ideas Lab は、言葉通りとてもクールだった。Ideas Lab とは、Dyson School of Design Engineering の学生主導で運営されている工房のようなラボで、ウェブサイトに “Ideas Lab is the perfect playground for design engineers.” と書かれているように、時間が許す限りこの部屋に籠っていたくなるような、ワクワクが止まらなくなる空間だった。設置機材の充実だけでなく、学生主導での運営でオープンスペースであるというところにもとても興味が湧いた。



図 10 Ideas Lab の様子

4. 将来への展望

この2ヶ月間は、国際的なキャリアを切り拓く礎となる、かけがえのない時間だった。世界中から集った人々と出会い、語り合い、共に学ぶ日々の中で、「私は何者なのか」「私は何を成し遂げたいのか」「私はどう生きたいのか」、絶えず自分に問い続けた。研究者を志す者として、また一個人として、自分自身を多様な文脈の中に置いて見つめ直すという経験は、国内では得難い貴重な体験であった。異なる価値観や背景を持つ人々と交わる中で、自分の研究の立ち位置や社会的意義を相対的に捉え直すことができた。このようにして培われた視点は、今後の研究活動においても必ずや力になると確信している。

また私は今回の経験を、単なる「一度きりの滞在」に終わらせるつもりはない。今年の10月より、科学大の博士後期課程に進学する。博士課程在学中に、私は必ず、ロンドンに戻って再び研究を行いたい。異なる文化が交差する刺激的なこの地で、もう一度、自分の問いを深め直したい。ロンドンでの研究活動を叶えるために、博士後期課程進学後は、さらに食欲に研究を行っていきたい。

5. その他

思い出深い写真たちを以下に載せる。



図 11 Abbey Road にて



図 12 全員未経験スカッシュ



図 13 出身地の料理を振る舞い合おうの会



図 14 学内のパブ、Union にて



図 15 動物フレンドリーなロンドン

6. 謝辞

本留学は、Tazaki 財団のご支援なしには文字通り実現し得ないものでした。多様な人々と出会い、思考し、議論し、多くを学び、自分自身を見つめ直す貴重な時間となりました。Tazaki 財団創業者である田崎忠良氏をはじめとした Tazaki 財団の皆さまに、この機会をお借りして心より感謝申し上げます。ありがとうございました。